

- ① 標準化がよくできていること。
- ② 妥当性や信頼性が高いこと。
- ③ 客観性があること。
- ④ 実用的であること。

などである。

教育相談にあたって、心理検査を選ぶ場合においても、以上のことがらを参考にするとともに、次のような点に、特に注意をしたい。

- ① 問題のありそうな点にさぐりを入れる場合は、その問題領域に近い検査を選ぶ。

例えば、異常行動の原因が「知恵おくれ」ではないかと疑診される場合は、個別式知能検査を選ぶ。

- ② 面接や観察で得た情報を吟味する場合は、その情報にもっとも近い内容を含む検査を選ぶ。

- ③ 面接や観察で得られなかった情報を補う場合は、逆に得られた情報を除外した検査内容を含むものを選ぶ。

- ④ 短期間に結論を出さなければならない場合は「テスト・バッテリー」を使用する。

- ⑤ 知的な情報を相手に与える必要がある場合は、相手の知りたい情報にもっとも近い内容を含む検査を選ぶ。

例えば、将来の進路に迷っているような場合は、職業興味検査や職業適性検査などを選ぶ。

(4) テスト・バッテリー

心理検査には、さまざまな種類のものがあるが、それらは、それぞれ測ろうとするものを独自にもっている。

従って、個人をよく理解するため、あるいは、個人のある行動の要因を診断するためには、多くの特性について、多面的・総合的に診断することが必要である。

心理検査は、大別すれば、知能、学力、性格、適性および環境についての検査があり、これらの諸検査を問題によって選択することにより、問題を多面的に診断することができるのである。

しかしながら、多面的な診断を求めるあまり、

あれもこれもと、あまり多くのテストを用いると、結果の解釈に、時間と労力を費やすのに終わってしまい、総合的な診断ができなくなってしまう。だから、対象となる問題の性質に応じて、慎重に選択し、最小必要な面から選択し、結果を求めて、能率的で、実効のある診断を目指さなければならない。

理想的には、診断しようとする問題に関して、仮説をたて、その仮説を検討するために、必要なテストを組み合わせるといったやり方が望ましいのである。

例えば、学習指導のための学力を診断する場合、学力に影響する主要因として、知能、学力、性格（特に興味・関心や意欲）、学習法、および学習環境が仮定される。だから、学力検査に加えて、これらの諸検査を行うことにより、子供の学力の状態、それに影響を与えている諸要因の実態を把握することができ、そこから、予見に基づいて、適切な指導法が考え出されるであろう。

このようなテストの組み合わせのことを、「テスト・バッテリー」とよんでいる。

ここで注意したいことは、「テスト・バッテリー」によって、診断の方法が客観化され、科学化されたとしても、教育相談をまったくコンピューターシステムに乗せることはできないということである。

これは、検査をする人、される人、ともに、自然科学の対象とはちがって、人間であるがゆえに、内的、あるいは外的な条件によって、支配されやすいということからである。

(5) 心理検査の種類

現在、一般的に多く用いられている検査は、表1のようなものがある。